

場連絡を迅速に行った。大会運営時にはオリンピック期間中が24時間体制、パラリンピック期間中が19時間体制でオペレーションが継続された。

東京2020大会はスポーツの祭典であると同時に、日本のICTの実力を世界に示す試金石でもあった。NTTは自社が培った研究開発成果をもって、大容量通信と強固なセキュリティの両立に挑んだ。結果的に大会運営を安定させることに成功し、ICTサービス事業者としての総合力を内外にアピールできた。

この経験は、単なる大会の技術支援にとどまらず、大会終了後のDX推進や新産業創出を後押しし、長期的に見れば社会課題の解決にも貢献し得るものだった。例えば、医療分野における遠隔診療の精度向上や画像診断のリアルタイム共有、教育分野におけるオンライン授業の質の向上など、既に社会のさまざまな領域において、東京2020大会の技術が応用されている。今後は、更なる研究開発と社会実装が加速することによって、人と情報がシームレスにつながる持続可能な社会の実現が期待される。

(3) 大阪・関西万博

NTTグループは2025年4月13日から6カ月間開催された大阪・関西万博で企業パビリオン「NTTパビリオン」を出展し、最新通信技術を駆使した体験テーマ「PARALLEL TRAVEL (時空を旅するパビリオン)」を掲げた(図表2-4-3)。NTTパビリオンでは、過去から未来へと時間と空間を超える旅に来館者を誘い、人類のコミュニケーションの本質を問い直す構成とした。3棟の展示棟と1棟の事務所棟からなる開放的な設計で、自然と建築、リアルとデジタルが融合する空間をめざした。

建物自体も「感情を纏う建築」というコンセプトで設計されており、カーボンファイバー製のワイヤーに手が触れると音が鳴り、外壁を覆う布は風や来館者の熱狂に呼応して揺れ動くなど、まるで生命体のように脈動した。これは、人と自然とデジタルが心地よく共存するパビリオン空間を創造することで、テクノロジーが単なる機械ではなく人の感情やつながりを包み込む存在であることを示そうとしたものだ(図表2-4-4)。

図表2-4-3 ▶NTTパビリオンの外観



出所：NTT「NTTパビリオン」NTT EXPO2025

展示はガイドツアー形式で約20分間、Zone1～Zone3の3部構成とした。Zone1では手紙、モールス電信機、黒電話からスマートフォンまで歴代の通信手段・機器を展示し、大型映像で通信技術の歩みを振り返ることで、人々の「つながり」への普遍的な欲求と過去の技術で埋めきれなかった課題を提示した。これは次世代通信への序章として、「遠く離れた人ともつながりたい」という人間の根源的願いを来館者に再認識させる意図があった。

NTTパビリオンのZone2では、NTTの次世代情報通信基盤「IOWN」を活用した目玉デモンストレーションを用意した。世界的テクノポップユニット「Perfume」のライブパフォーマンスを通じた3D空間伝送の体験である。NTTは大阪・関西万博開幕直前の2025年4月2日、Perfumeの新曲ライブを大阪府吹田市の万博記念公園(1970年大阪万博の跡地)で収録し、約25km離れた大阪・関西万博会場(夢洲)のNTTパビリオンへIOWNネットワーク経由で空間ごと伝送する実験を世界で初めて成功させた。この実験では20台以上のカメラやセンサーで演者と舞台空間を丸ごと3次元計測し、得られた巨大な点群データと映像をリアルタイムで高解像度化する動的3D空間伝送再現技術によって、離れた会場に遠隔地の「場」そのものを再現した。

加えて、NTT研究所が開発した触覚振動音場提示技術を応用し、演者のステップに連動した床振動まで伝送することで、観客は視覚・聴覚だけでなく振動という触覚情報まで含めた没入感を得られた。これは「世界初の3D空間伝送」と位置付けられ、離れた場所のパフォーマンスがまるで目の前で実演されているかのような臨場感を生み出した。

Zone3では、デジタル分身(アバター)技術を使い、来館者一人ひとりの分身キャラクター(= Another Me)を生成・投影した。言語や文化の壁を超えて他者の分身同士が交流し、自分のもう一つの可能性と出会うという演出で、未来の自己拡張の姿を問いかける内容だ。

図表2-4-4 ▶感情をまとう建築の仕組み



出所：NTT「NTTパビリオン」NTT EXPO2025